INTERVIEW

結成10年を超え、いよいよ緻密を究める渾身の力作「ブラームスの交響曲第3番&2台ピアノのソナタ」誕生

ピアノデュオ・ドゥオール

【ピアノ・デュオ】

ききて・文＝山野雄大
写真＝青柳 聡

しなやかな錬磨と緻密な呼吸――いよいよ充実をみせるピアノ・デュオが快進撃を続けている。ドイツ・マンハイム音楽大学大学院で学んだ藤井隆史と白水芳枝のふたりが2004年に結成した「ピアノデュオ・ドゥオール」が、好評を博したブラームスの交響曲第1番（連弾版）のアルバムに続いて、交響曲第3番の新録音をリリース。同じブラームスが試行錯誤の末に生み出した力作、2台ピアノのためのソナタとの併録で、今回も聴きごたえ深いアルバムとなった。

充実した10年の節目に

フランス語の「ふたり（ドゥ）」とヘブライ語の「光（オール）」を連ねた造語を冠したこの夫妻デュオは、2009年のデビュー盤『ドゥオール』からルトスワフスキやラヴェルなど覇気も呼吸も見事な音楽を聴かせてくれていたが、その深化も順調だ。

昨2014年は結成10周年。それを記念するリサイタル・シリーズも各地で開催して見事な時空を拓いてくれた。

「デュオは人間関係など難しくてなかなか続かないもので、夫婦であってもそう。10年続くのは珍しいかも知れません」と藤井隆史が言えば、横で白水芳枝も「よく『今度会うとき続いてるかねぇ』なんて言われましたけど」と明るく笑う。「デュオをやっていこうと決めた頃から、10年はやっていこうという思いはありました」

長いようであっという間で……歳月はふたりの絆も音楽も深め広げてきた。その過程は、デュオが果敢に続けるレコーディングにも刻まれている。2枚目に録音したブラームスの交響曲第1番（連弾版）に、多種多様な選曲もユニークな3枚目『JEWEL』……ときて、続く4枚目『カルナヴァル！』では、ラヴェルにデュカス、サン＝サーンスと連弾版、2台ピアノ版で聴かせるフランス名曲選もお見事だった。これは昨年おこなわれた結成10周年リサイタル・シリーズでも演奏された演目だが、ふたりのピアニス

トが創り出す音宇宙は、隙のない一体感からこそ生まれる深い手応えに、〝ふたりであること〟の意味をあらためて（喜びとともに）感じさせられたものだ。

10年におよぶ活動のなかで、ヴァラエティに富んだ秀演が数々のレコーディングに蓄積されてきたのも貴重だが、先述のように最新盤はふたたびブラームスだ。これも10周年リサイタル・シリーズでも披露された演目だが、なんと濃密で明晰な！と喜びを感じる演奏だった。これがセッション録音できっちり残されたのは、ドゥオールの歩む道程でも時宜を得たものだと思う。

藤井「10周年の節目にシリーズの演奏会をできてよかったですし、だったらCDも残そうよ、と。人生、元気でやっていける時間は長くないし、後に続く人たちにもなにかを残しておきたいなと」

白水「自分たちが惹かれ続けているものはと考えると、やはりブラームスだったんです」

デュオ作品としての表現を緻密に究める

今回のブラームス2曲、交響曲第3番のほうはもちろん編曲だが、青年期の作曲家が残した瑞々しくも力強い秀作、2台のピアノのためのソナタ ヘ短調のほうは、もともと弦楽五重奏曲だったものを書き改めたもの。さらにここからピアノ五重奏曲へ短調に書き直されたかたちのほうが有名になっているけれど、ブラームス自身は2台ピアノ版にも愛着を抱いていたことからも知れるように、デュオ作品としても秀逸だ。交響曲の編曲も然り。

藤井「デュオ作品を数々残している作曲家は、やはり〝一緒に弾く誰か〟がいたからこそ書いたんだな、という愛情のようなものをあらためて感じますね。弾きやすい弾きにくいを超えて、弾いているお互いが充実している作品だと思います。〝クインテット版だとあの楽器が弾いてるところだな〟とか、交響曲の場合なら〝これはクラリネットのメロディだな〟とアイディアとして感じるところはもちろんあるにしても、ピアノのための作品として自然に感じながら弾いていることのほうが僕は多いですね」

白水「原曲のクインテットを一生懸命聴いて、〝あぁ、この間は、とてもいいね……〟というような弦楽器ならではの表現を研究したりするんですが、いざピアノの前に座って音楽ができあがってくると、いつのまにか楽器のことをイメージしなくなっています。この音のこの響きにどう応えるか……そこに集中している」

1音ずつ、どのくらいのばすのか、どのくらい鳴らすのか、細かく考えて作っていくんです（白水）

ふたりの息ではなく、指が落ちて鍵盤の底にあたる瞬間が一緒でないとずれてしまいます（藤井）

藤井「弦とピアノで弾くクインテット版と違って、ピアノ・デュオの場合は、ピアノ同士で発音が一緒なので、聴いているほうにも弾いているほうにも〝ずれ〟が非常に気になるものなんです」

白水「弦楽器なら気にならない、むしろ自然なものであっても、ピアノだとね」

藤井「ですから、原曲があっても、完全にピアノ作品という意識で弾かないと〝ずれ〟が生じてしまう。ふたりの息ではなく、指が落ちて鍵盤の底にあたる瞬間が一緒でないとずれてしまうので、そこを甘くしたままだと本番が怖くて仕方ない」

白水「交響曲第3番の冒頭も、オーケストラなら本当に広く豊かに弾けるけれど、私たちは譜面通り弾くとキツく堅い音になってしまう（笑）。1音ずつ、どのくらいのばすのか、この指は、どのくらい太く鳴らしたら全体がまとまるのか……細かく考えて作っていくんです」

藤井「さらに連弾編曲版のリスクとして、メロディを高音で弾いている場合でも、原曲を聴いている人はそれを高音のものとして意識しているとは限らない、ということがあります」

どのように響かせていくのか、1音ずつ緻密に考え抜き、それをデュオとして共有しきっていなければ音楽として成立しない、というわけだ。

藤井「ピアノの場合、音を遠くまでいい音で響かせてゆくためには、指から身体からいろいろなことを考えていかなけれ

ばならないですね。彼女の右手が弾いているプリモ（第1ピアノ）のメロディは、僕が弾いているバスを制御するとよく響く、ということもあります。そして、その間にどれだけ入っていけるか……」

デュオの演奏論、お二人ほんとうに話が尽きないのでご紹介しきれないのが残念だが……演奏のみならず教育活動にも力を入れているドゥオール、今後は彩の国さいたま芸術劇場を拠点にピアノ・デュオを教えるセミナーも企画しているとのこと。

藤井「デュオは音に包まれる感じ――聴いているかたにとっては音を浴びている感じ、の愉しさがあります。しかし、レッスンでは単発で終わってしまいますし、そもそも二人でやることですから、なかなか長続きしない。でも日本ではまだなかなか無い〝そこにいけばデュオができる〟場所をつくれたらと思っています」

2台ピアノ版《ゴルトベルク変奏曲》に挑む

さて、優れたブラームス・アルバムの次は……と今後の録音計画をお尋ねすると、バッハ《ゴルトベルク変奏曲》の2台ピアノ版というからこれまた大きな挑戦だ。

白水「12月に《ゴルトベルク変奏曲》のコンサートをやるんです。私たちはいつもリサイタルの後で録音するんですけど、今回はコンサートに間に合うように夏にレコーディングしようと（笑）。これはヨゼフ・ラインベルガー編曲の2台ピアノ版なんですが、やはりロマンティックな部分もあり、バッハの原曲を忠実に再現したところだけでなく対位法を意識しながら4手用に編曲した部分など、おもしろいものですね」

藤井「いまでは原曲だけでなく、いろいろな編曲で演奏されたりしていますが、なにしろ規模が大きい作品なので、僕らのように生活の時間を共にしているデュオであっても、取り組むにあたってはなにかクラっとくるような印象があります。でも、結成10周年のシリーズを終えました、だけでなく、その次へ行かなければと思いますし、これも自然な流れだと思っています」

白水「〈アリア〉だけは原曲通りソロで演奏したいので、そうするのですが、全体にかなり歌う編曲なんですよね……って私たちが弾くからかも知れませんけど（笑）」

藤井「人によっては、これがバッハなのかと思われるかたもいるかも知れませんが、神々しい光が生まれるような瞬間があったりとおもしろい編曲だと思います。ハーモニーの陰影もすばらしい」

究めゆく表現の深さと広さと……心あわせて音楽を磨くデュオ、バッハ録音も期待してお待ちしよう。

ブラームス・イン・F
〔ブラームス：2台のピアノのためのソナタ，交響曲第3番（作曲者編による4手連弾版）〕
〈録音：2014年12月〉
［Studio N.A.T Ⓓ NAT14491］

カルナヴァル！
〔ラヴェル：マ・メール・ロワ，デュカス：交響詩〈魔法使いの弟子〉，サン=サーンス：組曲〈動物の謝肉祭〉（ガーバン編による4手連弾版）〕
〈録音：2013年9月〉
［Studio N.A.T Ⓓ NAT13361］

JEWEL
〔ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲，ミヨー：スカラムーシュ，プーランク：シテール島への船出，ショパン：小犬のワルツ（A.サムエルソン編），幻想即興曲（M.グールド＆B.シェフター編），リスト：〈ドン・ジョヴァンニ〉の回想，J.S.バッハ：主よ、人の望みの喜びよ（M.ヘス編）〕
〈録音：2011年3～4月〉
［Studio N.A.T Ⓓ NAT11121］

ブラームス：大学祝典序曲，交響曲第1番〔作曲者編による4手連弾版〕
〈録音：2009年12月〉
［Studio N.A.T Ⓓ NAT09501］

Deu'or
〔ルトスワフスキ：パガニーニの主題による変奏曲，ラヴェル：スペイン狂詩曲，シューベルト：幻想曲，ラヴェル：ラ・ヴァルス〕
〈録音：2008年4月〉
［Studio N.A.T Ⓓ NAT08401］

■次回新譜
J.S.バッハ：ゴルトベルク変奏曲（ラインベルガー編による2台ピアノ版）
〈録音：2015年7月〉
［Studio N.A.T Ⓓ NAT15291］ ※2016年1月末発売予定

Pianoduo Deu'or
藤井隆史と白水芳枝の二人が2004年にドイツで結成。国内外で450近いステージを重ね、ピアノ・デュオを中心とした活動で高く評価を受ける。藤井は、東京藝術大学卒業、同大学院修了。植田克己、クラウス・シルデ両氏に師事。現在、武蔵野音楽大学講師。白水は、東京藝術大学卒業。笠間春子、井内澄子両氏に師事。現在、国立音楽大学非常勤講師。藤井、白水ともマンハイム音楽大学大学院でロベルト・ベンツ、パウル・ダン両氏に師事、ソロ科、ピアノ・デュオ科を最優秀修了。これまで、シューベルト国際ピアノ・デュオ・コンクール第3位、ロンドン国際音楽コンクール1位なしの第2位、青山音楽賞バロックザール賞などを受賞している。

<ドゥオール演奏会情報>
■リサイタル
◎9月15日（火）19:00　ヤマハ銀座コンサートサロン
ラヴェル：マ・メール・ロワ，ラ・ヴァルス，プーランク：4手のためのピアノ・ソナタ，2台のピアノのためのソナタ
問い合わせTEL 03-3572-3132
◎11月8日（日）14:00　青葉の森公園芸術文化ホール（千葉）
ブラームス：ハンガリー舞曲集第1集より，ラヴェル：ラ・ヴァルス，バーンスタイン（マスト編）：《ウェスト・サイド・ストーリー》からのシンフォニック・ダンス，他
問い合わせTEL 043-266-3511
◎12月3日（木）19:00　兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
◎12月21日（月）19:00　東京文化会館（小）
J.S.バッハ：ゴルトベルク変奏曲（ラインベルガー編による2台ピアノ版）
問い合わせTEL 03-3501-5638